

私らしく働く、専門職という選択～責任と自由は表裏一体～

インタビューの概要：弁理士の仕事に興味はあるけど、実際のところどうなの？女性弁理士に仕事のやりがいからワークライフバランスまで迫ります。



今回インタビューを受けていただいたのは、アパレルの企画・デザインの現場を経験した後、意匠・商標を専門とする弁理士として、企業のブランドづくりを支える田中 咲江(たなか さきえ)さん。所属はCP JAPAN 総合特許事務所、2012年に弁理士の資格を取得。デザインの目線を持つからこそ見える、弁理士の仕事の面白さと働き方を伺いました。

～目次～

1. 弁理士を目指したきっかけ
2. 弁理士の仕事のやりがい
3. ワークライフバランス
4. これまでと今後のキャリアパス
5. 弁理士を目指す若者へメッセージ

1. 弁理士を目指したきっかけ

——どのように弁理士という仕事を知りましたか？

知財の調査会社で事務を手伝うことになったのがきっかけで、知財業界に興味を持つようになりました。父が自動車会社の知財部で働いていたこともあり、知財に関する資格の話を聞いた際に「弁理士」という仕事があることを知りました。

——前職での経験は、弁理士の仕事にどのように活かされていますか？

私の仕事は、ブランドやデザインに関するテーマに深く関わることが多く、アパレル業界での経験が大いに活かされていると感じています。企画、デザイン、営業まで幅広く携わっていた経験は、作り手の現場の状況をイメージすることに役立っています。現在は代理人という立場なので、外から全体を俯瞰し、必要なことを整理してアドバイスすることを心掛けています。

——弁理士の仕事に対して、どのようなイメージを抱いていましたか？

当時は弁理士の方を多く知っていたわけではなく、具体的なイメージはありませんでした。ただ、点で存在していた自分自身の経験が、知財の仕事の中で線としてつながっていくかもしれない、そう感じたことは覚えています。



2. 弁理士の仕事のやりがい

——どういった相談が寄せられますか？

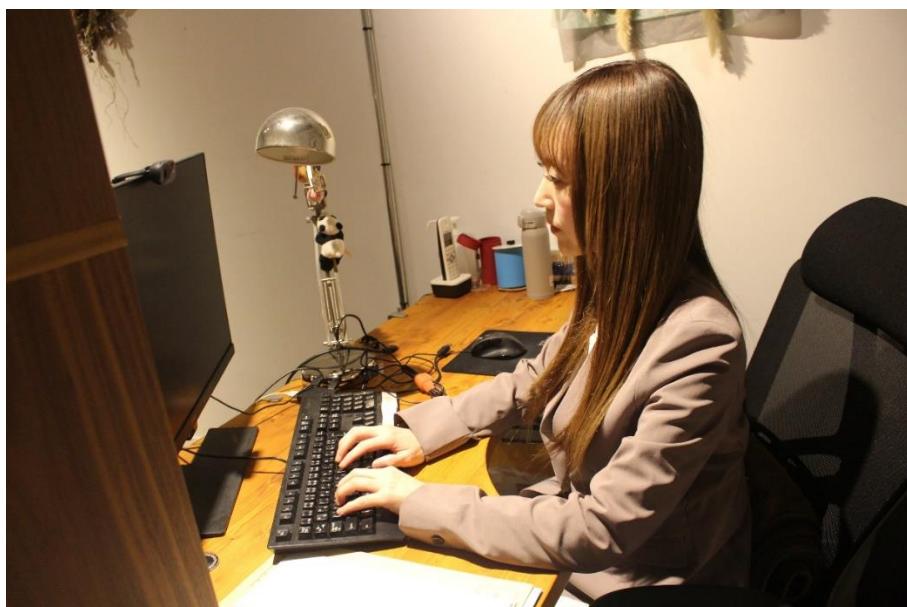
“新しい製品を開発した”、“新しいお店をオープンする”といったように、新しいコトやモノに関する相談が多いです。一方で、“マネされた”、“警告を受けた”といった困りごとを抱えて相談に来られる方もいらっしゃいます。また、ブランディング・マーケティングの専門家や、他士業、デザイナーなど、さまざまな専門職の方と協働することもあり、日々学ばせてもらっています。

——この仕事の面白さは何ですか？

世に出る前の新しいモノやサービスに出会う機会が多いことですね。自分が関わった製品やサービスが世に出て注目されると、とても嬉しい気持ちになります。海外案件に関わることもあり、グローバルな視点で物事を捉える機会が増えるのも面白さの一つです。また、弁理士はお客様と行政の“橋渡し”ができる立場です。お客様の思いや状況を汲み取りながら、制度や手続の言葉に翻訳して伝える。代理人だからこそ果たせる役割があり、そこに使命を感じています。

——この仕事ならではの難しさや、それをどのように克服していますか？

知財に関する法律の理解や継続的なキャッチアップはもちろんですが、それだけではなく、社会のニーズや国際情勢、業界トレンドなども把握しながら、お客様にとって最適な助言を組み立てる必要があると思っています。代理人として大切なのは、お客様の立場を理解しつつ、専門家として適切な判断を示すことです。そのために、信頼関係を築けるような聞き方・伝え方に気を配っています。あわせて、日頃から五感のアンテナを張り、情報収集や情報交換を継続することを心掛けています。



3. ワークライフバランス

——プライベートと仕事の両立はできますか？

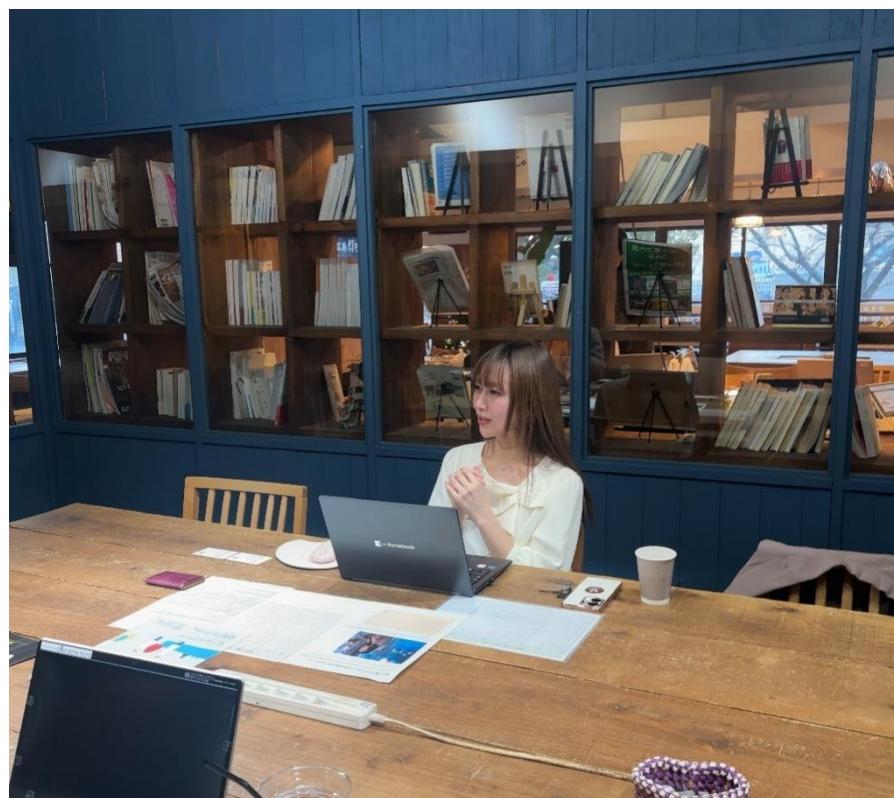
働き方次第だと思います。女性の弁理士はまだ多くはありませんが、働き方を選べる環境は整っていると感じています。

——テレワークやフレックスタイム制など、柔軟な働きは可能ですか？

リモートワークも進んでいて、ライフステージに合わせて働き方を調整しやすくなっていると思います。私の事務所では、特定の勤務時間に縛られることなく自分でスケジュールをアレンジできます。その点は私にとても合っていると感じています。

——出張は多いですか？

役職や外部活動の関係で、週によっては出張が続くこともあります。一方で、事務所や自宅で集中して書類作成に取り組む日もあり、メリハリのある働き方になっています。



4. これまでと今後のキャリアパス

——事務所や企業、独立などの選択肢がある中で、現在の働き方を選んだ理由は何ですか？

様々な選択肢を全て経験したわけではないので断言はできませんが、個を活かしつつ幅広い経験ができる場所だと感じました。自由に仕事をさせてもらっている分、責任も大きいですが、だからこそ大きなやりがいを覚えています。

——今後、どのようなことに取り組んでいきたいと考えていますか？

実務スキルを高めるための研鑽は当然のことなので、それ以外のことをお話しますね。私はブランディングについてお話をする機会が多くあるのですが、そのたびに、我々弁理士自身のブランディングについて自問しています。こうしたテーマも、若い人たちと一緒に考えていきたいです。

また、中学生に職業を紹介する活動も行っています。知財や弁理士について知ってもらうことが、将来の選択肢につながるかもしれません。今後もより広く周知を図っていきたいです。そして、もし自分の活動が将来弁理士になる誰かに影響を与えていたら、その人が「この仕事を選んでよかった」と思えるよう、弁理士の就業環境をより良くしていく責務も感じています。

——弁理士として働く中で、どのようなスキルや経験が重要だと感じますか？

想像力と、イメージを言葉に落とし込む“言語化能力”は非常に重要だと思います。生み出されたモノやサービスが、将来的にどのような価値を持ちうるのかを考えながら、戦略を立てていく。お客様が必要としていることは千差万別です。そのニーズを丁寧に引き出し、特許・意匠・商標などの取得にとどまらず、トータルで支える姿勢が求められると感じています。



5. 弁理士を目指す若者へメッセージ

——合格に向けて、どのように勉強しましたか？

仕事をしながら、退勤後に予備校に通って勉強しました。最初は通学形式でしたが、1年目に短答式筆記試験に合格したため、2年目の論文試験は通信形式に切り替え、無事に合格することができました。最近は、自宅で学習しやすい環境もさらに整ってきてていると思います。

——就職や資格取得を目指す方々に対して、アドバイスやメッセージをお願いします。

自分が何に対して喜びや楽しさを感じるのかを知ることが大切だと思います。誰にでも得手不得手があり、価値観もさまざまです。仕事は多くの時間を過ごす場所になります。自分の得意なことを発揮てきて、喜びを感じられる場所を見つけてほしいです。



(写真右と左はインタビューを担当した弁理士室職員)

——貴重なお話をいただき有難うございました。

※本インタビューは2025年12月時のものです